

ウィーン日本人学校における英語指導と実践

前ウィーン日本人学校教諭

所属 学校 教諭or校長 氏名

キーワード：在外教育施設、ウィーン、英語教育、小学校の英語、国際交流、入試対策

赴任校の概要（20〇〇年〇月〇日現在）

学校名・日本語：例 ウィーン日本人国際学校

学校名・現地表記：例 Japanische Internationale Schule in Wien

URL: <https://www.japaneseschool-wien.at/>

児童生徒数 幼稚園 〇〇人 小学部 〇〇人 中学部 〇〇人（公表可能であれば）

章

1. はじめに

縁あって在外教育施設で教鞭をとる機会を頂いた。これにより、私は小学校から大学まで、英語に関する内容で授業・講義を行うという、本当に貴重な経験をした。中でも特にウィーン日本人学校での3年間は私にとって特異な体験であった。ここにその概略を紹介したい。

章

➡ 一行あけてください。

2. 前任者からの引き継ぎと現実

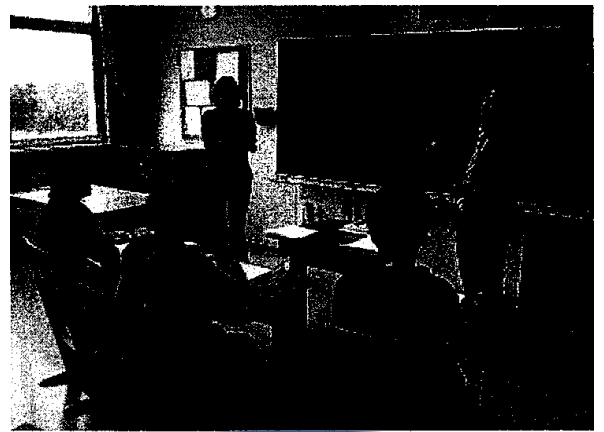
節

(1) 海外在住の児童生徒の語学力に対するイメージ

「海外生活の長い児童生徒や、英検合格者が何人かいて、概して児童生徒の英語力はかなり高い。」前任者から引き継いだ膨大な資料の中の一文に私は着目した。「さすがは在外教育施設。それなら高校レベルのテキストをたくさん用意しよう。」と私は考えた。しかし、自分の考えは過ちであり、この思い込みこそが多くの海外居住者に葛藤をあたえている現状を私は後に知ることとなった。

「海外で生活しているから英語が出来る。」私もそう思い込んでしまった、この根拠の無い考え方に、今までどれだけの人が苦められてきて、そして今後もどれだけ多くの人たちが苦しめ

られていくのだろうか。語学はどこにどれだけいたかではなく、どこで何をどれだけしたかにかかっている。しかし、海外居住者やその家族は、学年に関係なく、周囲から「海外に住んでいるから英語ができる。」と思われてしまいがちである。



外国人講師とのチームティーチング

タイトル

節

(2) 保護者や地域の要望と文部科学省の指針

① 保護者や地域の要望

項

ウィーン日本人学校の多くの関係者から、「子どもの英語力を高めて頂きたい。宜しくお願いします。」と激励の言葉を頂いた。小学校低学年の保護者からも、「英語が流暢に話せるようにして欲しい。」という要望がたくさんあった。それは日本と同等の教育を行うという在外教育施設の理念を超えた英語に対する期待だった。中学生に関しては、学習指導要領の内容以上に、学習塾、英会話スクールのような役割を果たすことを保護者や地域から要望された。「入試対策英検対策はもとより、とにかく英語を話せるようにして頂きたい。」という要望の背景には、前述した海外子女に対するイメージが関係していた。

項

② 学習指導要領と英語（英会話）の授業の位置づけ

文部科学省より、新学習指導要領では小学校5・6年で週1コマ「外国語活動」を実施すると発表があった。さらに、外国語活動の意義は、「音声を中心に外国語に慣れ親しませる活動を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養うことを目標として様々な活動を行ないます。」とある。小学4年生以下に関しては特に記述も